

原点に戻って

渡辺美知夫

(1)

太陽、大気、水、大地——これらはもとこれ天等の賜物である。人類、否、生きとし生けるもの全ての共有物である。どれ一つとして人間の創り出したものはない。従って何れの一つも、人間の智慧によって活用することは、積極的に促進すべきであつても、これを一部の権力や富が壟断することは、道理に合わない。

これら四者のうち、現在際立って不当な状況にあるのは、大地であり、次いでは水と大気であろう。残る一つまでもが同様の状態にならないうちに、われわれ人間は原点に立還つて、事態を謙虚に、大局的に、正視する必要がある。既得権などというものを楯にとつて、エゴイスティックな自己主張にうつつを抜かしている、遠からぬ将来に、人類は自分の首を、わが手で締める羽目に陥りかねない。

大地を天に返そう。
真のサーヴァイヴァルは、この原点に立還ることから始まる。

ぼくは若い頃習った英文の中で、Exploitationという字に出会い、辞書をひいて、まずそれに「偉業」という訳語がついていることを知ったが、さらにその続きを読み進むと、最後に「搾取」とあるのに驚かされた。同じ一語が「偉業」であると共に、「搾取」であるとはどういうことか。Exploit(自分の利益のため、他を利用する)とは、人間の都合だけを考える立場からは「偉業」であるかも知れないが、人間の立場を超えた、客観的な見地からは、人間の「搾取」ということになり兼ねないというロジックが、篤と納得がいくのには、大分ひまが要った。

(ついでながら、ぼくは学生時代に、市河三喜という「博言学者」から、辞書はひくくものではなく、読む

ものだよ、と訓えられたことを、懐しく想い出す。

西洋には、「七つの大罪」ということがあって、それは *pride* (プライド)、*covetousness* (貪欲)、*lust* (好色)、*anger* (憤怒)、*gluttony* (貪食)、*envy* (羨望) そして *sloth* (懶惰) の七つを指すと、ほくはカナダのおばさん先生から教わったものだが、七つが七つとも、中学生のぼくには、至極日常的な「罪」ではあっても、最大深重の罪とは思えず、なんとも怪訝ツザンな思いを抱いたものであった。またもしこの七つの単語が、その罪深さの順序に並んでいるものとする、最後の *sloth* は身に泌みて実感があるにしても、最初の *pride* は、どうにも腑に落ちない思いがしたものである。大人たちはよく少年のぼくに「プライドを持って」と勧めたものだからである。この辺りにも、どうやら人間のものの考え方に、相当深刻な奥行きがあるらしいことが感じられた。大人の勧めるプライドは「矜持」とか「自尊心」とかいうことになるが、同じプライドに「傲慢」「思い上り」という訳語もついているのである。

Exploitation を「偉業」とすることは、ひよっとすると人間の「思い上り」なのかも知れない。またこの

字には「開発」という訳語もあるとなると、これは甚だ今日的な問題につながることになる。

悩み多い青春時代、こうしたこととつ追いついてると、今度は数学の時間に、ユークリッド幾何学は、「平行線は交わらない」という仮説の上に立っている、という話が出た。ぼくは啞然とした。平行線は平行、つまり交わらないから平行線なのである。それをわざわざ仮説のなんのとは、鬼面人を驚かす話ではないかと腹が立った。ぼくがこの経験から、後日引き出した命題は、もし平行線は交わらないということ絶対視したら、非ユークリッド幾何学は生まれなかつたであろうということであった。さらに言えば、あらゆる提言には必ずそれを支える「仮説」があり、いかなる命題も無条件には成立しないらしいという気がした。われわれは平生、その条件——仮説——には気が付かないか、無視しているだけのことなのである。原点到に立還るとは、この基礎条件——仮説——を自覚することなのである。

(2)

ホモ・サピエンスという動物は、身体的には動物の

中でも甚だ無力な部類に属する。従つて彼は自己防衛のために、万策を尽すことになる。弱者の文字通り必死の努力である。孤立せず、群を作るのも重要な一策である。その中から何等かの意味で優れた者、強い者が頭角をあらわし、比較的劣つた者、弱い者は、優者、強者に倚り頼むことで、身の安泰を図ることになる。エゴイズムの原点である。ここから英雄や権威が生まれ、それを中心とした体制が築かれる。普通の人間にとつて、その英雄や権威を崇拜し、それに身を委せることが、保身の途ということになるのは、一応無理もないことと言わざるを得ない。一旦ある人なり権威なりに身を寄せると、その人なり権威なりが強大であればあるほど、身の安泰が保証されることになる。そこで自ら英雄でも権威でもない、只の人間の中には、自分の頼む人や権威を傘に着て、虎の威を仮る狐になることで、虚妄の自己満足を図る者も出てくる。体制に乗っかり、便乗している者ほど、肩を怒らせ、ふんぞり返り、自己の立場を絶対視して、他を許さない。

だからブライドは七つの罪の筆頭なのである。ある体制が確立し、安定している時、われわれはそ

の体制を支えている原点——仮説——を忘れている。しかしそのような「幸福な」時代にあつても、敢て原点に立還つてみようとする、醒めた人が必ずいる。世間はそういう人を、通例迂散くさく思い、甚だしい場合には、束になつて迫害したり、圧殺したりする。昔そうであつたし、今もまたその通りである。現体制が揺らぐことは、自己の利益に反することになるからであるが、彼等自身はこの動機を自覚していない。困つたことに、自分こそ正義を行つていふと思ひ込んでいふ。意識の退化、硬直である。

ヨーロッパの昔、中世と呼ばれる、ほぼ千年にも及ぶ間、聖職者たちの中にも、この種の人物が多くいて、権勢を誇つた。しかし流石に彼等の内部からも、やがて体制に疑義をさしはさむ者が現われて、近代精神の一方の魁まがねとなつた。マルチン・ルターである。エラスムスやカルヴィンの名も想ひ起こされる。

このような現象は、科学の世界で殊に顕著であつた。科学とは、自分の都合を棚上げにして、ものを見ることだからである。生き延びるためには、自分の都合しか考へる余裕のなかつた人間が、漸く自分の立場を離れて、自然一般を客観的に見ることができるよう

になったのは、ヨーロッパでは、ルターやエラスムスと同時代の、いわゆるルネサンス期のことであった。しかしヨーロッパにおいても、科学的なものの方には、体制を揺るがされることを怖れる同時代人に、快くは受け容れられなかった。否、それどころか、猛烈な抵抗を受けた。例えばコペルニクスは天動説の前に遡巡し、ジョルダーノ・ブルーノは焚殺され、近くはダーウインが『種の起源』の公表を、二十年もの間俾り続けた。体制の圧力、体制の自己検証のむつかさの、顕著な例がここにもある。

今は昔、大学騒動と呼ばれた騒ぎが、全国到る処で荒れ狂った。当時多くの属していた大学も、もとより例外ではあり得ず、昼間は学生たちの攻撃に曝され、夕方からは当面の対策に追われる、教授会という名の小田原評定が、連日深夜まで続いた。そして漸く帰宅すると、そこには一人は工学部、もう一人は政治学部に籍を置く男の子がいて、ここでも「論争」が繰り返され、疲労困憊に輪がかかったものであった。そのときばかりが強い印象を受けたのは、工学部の学生は保守的、つまり体制派であり、政治学をやっている方は反体制的であるという事実であった。全国的に工学部で

は騒動が起らないか、起こっても大したことはなかったようだが、広義の文科系と理学部の学生は、猛烈に「活動」したと覚えている。当時ばかりは、工学部関係の者が保守的になるのは、体制が揺らいだり、不安定であつては、彼等は仕事にならないからだなど、思い当たつたことであつた。

ところでわれわれは科学という語に、技術という語をつないで、科学技術ということをよく言う。この場合技術科学とは言わないところを見ると、文法的には科学は技術の修飾語なのであろう。つまり技術とは、一旦人間の利害を離れた科学を、あらためて自己の都合の中に取り戻したものである。素朴な利己主義を、科学という触媒によって洗い上げた上で、もう一度利己の世界に引き戻したものが技術である。科学が介在しているところが、呪術、巫術、錬金術、占星術などと基本的に違っている。技術は兎も角も利己の立場に戻っているので、科学よりは人間に受け容れられ易い。普通の人間には職人の方が科学者より親しみが持てる。体制を気にする必要がない。むしろ技術は、体制の温存を願うものである。

(3)

初めはまず自分の家族を守ることから始まって、ヒトの守備範囲は一族、部落、種族へと拡大し、侵略、攻防を繰り返すうちに、やがて国の意識も生ずるようになった。わが国では戦国時代ごろにはすでに国家意識が生じていたのかもしれないが、その後藩制が打ち建てられると、その組織が内訌的に整備された結果、近代的国家意識の芽生えは、相当な遅れを見せる結果となったと言えようが、世界的に見て、現在、人類は実質的には国単位のものの方を、超えることが出来ない状況にある。諸国家それぞれの利害得失に係わる、葛藤、軋轢に、日もこれ足らずという有様である。世界国家ということは、理念としては屢々問題にされてはいるが、実質上は未だ実体を備えるに至っていない。

こうした推移の中に、われわれは人類の意識の、発展、拡大の過程を辿ることができ、それを進歩と考えることも、不当とは言えないであろうが、この線上の発展、進歩は、すでに限界が見えていると言うべきではあるまいか。たとえ将来、世界を一丸とする単一國

家が形成されたとしても、その存立が原始時代と等しく、優勝劣敗の原理に基づくものであっては、その先は宇宙の「征服」——exploitation——でしかあり得ないのではあるまいか。衛星國群とかヨーロッパ共同体といった新綜合体が、すでに現実に存在してはいても、国を超えた、グローバルな世界國家を考へることに、なんとなく空々しさのようなものが感じられるのは、人類の意識がまだそのようなことを、具体的に考へる段階に達していないということの外に、世界國家実現の前提として、ある種のドラステイクな変革が必須であることを、われわれが直観しているからではあるまいか。

その変革の原理とは何であろうか。

(4)

われわれが教えられて来た歴史は、英雄や權威、彼等を中心に築かれた体制の、興亡、盛衰の跡であった。優勝劣敗の姿であった。今日までのヒトの歴史を貫く原理は、優勝劣敗を当然とする、生物界共通の原理であった。ぼくの用語でいえば、機能優先の原理である。機能的には、ヒトは決して一視同仁ではあり得

ない。機能的にはヒトは差別される。機能的には不平等は避け難い。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」ということは、機能優先の原理に基づいては成立しない。人類が生き残るためには、過去においては機能優先の原理が、有利に、従って優位に働いて来た。しかし現段階においては、人類はこの原理を超えなければ生き残れない。超えるとは否定することではない。勝つか負けるか、取るか取られるかという、二者択一、あれかこれかの原理では、ヒトはもはや生き残れない段階に差しかかっているのである。あれかこれかではなくて、あれもこれもである。一方を執って他を捨てるのではなく、双方を超えて双方を生かすのが新しい原理、新しい哲学である。今迄の原理とは質的に違うのである。「新人類」とは、こうした新しい原理に立つ人間のことでありたい。

人類は自然を超えることによって、真に人類プロパーになろうとしている。新しい意味の「万物の霊長」である。自然を超えるとは機能優先の原理を超えることである。ばくはそれを実存の原理と呼ぶ。実存の原理の下では、すべての人間、すべての生物、さらに凡そありとあらゆるものが平等である。差別がない。こ

の境地をギリシャ人はアガペーと言い、キリスト教では愛という。エゴイズムを超えた境地である。捨身飼虎の境地である。

人類の歴史は、集団としても個人としても、エゴイズム超克の歴史である。個人としても集団としても、何処まで超えられるかで真価が定まる。Take and take は露骨なエゴイズムであるが、それが「進化」として give and take になる。そこを更に出抜けると give and give の世界が展ける。機能優先の世界は give and take である。そして現代は正に give and take の時代なのである。現代に生きるわれわれは give and take は当然のこと、正しいことと思込んでいる。機能優先という基本条件の上に安住し、あぐらをかいて、それを疑うことなど夢にも思っていない。共生 (symbiosis) は愛ではないことに気付いていない。しかし機能優先のままでは、われわれはやがて共倒れになる。象徴的には核戦争による、滅びの道を迎えることになる。人類が原子破壊に成功して以来、戦争は自殺行為以外の何物でもなくなった。日本人はそのことの痛切な体験者なのである。

軍縮はいかに真剣に、熱心にこれを推進しても、要

するに軍備全廃ではない。極度に縮減された軍備であつても、唯一発の原子爆弾が温存されていれば、それは全地球を荒廃させる威力を、今はすでに備えている。軍縮ではダメなのである。軍備撤廃の原理は優勝劣敗の原理とは質的にちがう。

戦争放棄を明文化した日本国憲法は、機能優先の原理を超えて、実存の原理に基づいている故に、質的に卓越した、先見の明に基づく、貴重な法なのである。これをアメリカの押付けだとか、翻訳調だとかとケチをつける輩は、過去の戦争で甘い汁を吸った味が忘れられない、優勝劣敗主義者であると、ぼくには思われる。借物でない、翻訳調でない文章で、この条文を書き直すと、どういうことになるのか、機能主義者はその文例を示して貰いたい。

(5)

War doesn't pay. という句にぼくが初めて出遇つたのは、高等学校時代のことであつた。第二次大戦以前のことになる。当時のぼくはこの文を何と訳すべきか、戸惑つた。「戦争は支払わない。」とは一体何のことかと思つたものである。これが戦争は引き合わな

い、という意味だと判つて後も、ぼくは本当かなと思つた。日本は明治以来、日清、日露、そして第一次大戦で、いつも得をして来ていると、当時のぼくは思われられていたからである。多くの高等学校時代の友達の中の親爺さんは、本来医者であつたのが、第一次大戦中、船会社を興して、お蔭で巨万の富を積んだと聞いた。その親爺さんはその富を、理化学研究所という公共の研究機関の設立に費したということで、ぼくは成程戦争は儲かるもので、且良いものでもあり得るということ、正面切つては疑われないことになつた。

そこへ War doesn't pay. である。第二次大戦に完敗した今は、単純に、素直に考えれば、戦争は引合われないというのは明白な事実だと、ぼくには思えるのだが、今の世の中、それ程素直でも単純でもないらしい。交戦中の国に、臆面もなく武器を、往々にして双方に、売り込んで儲けている「先進国」が、五つも、六つもある。常々文化国家とはわしがごとさと、胸を張っている国も、その中に含まれている。当節は儲かつたら何をしてもよいらしい。

ぼくの好きな『唐詩選』は、「長安一片の月」と始まる。その詩の結句は「いつの日か良人遠征を罷め

ん。」である。古往今来、夫を、息子を戦線にとられた妻や母親の、怨嗟、悲嘆のすすり泣きは絶えたことがない。戦争は庶民にとっては、儲かるどころの話ではないのである。昔は世の中が民主主義ではなかったもので、という言い抜けもあったであろうが、現代は違ふ。庶民にとって戦争とは、いつもいつも苦しみと悲しみの因である。その外の何ものでもない。民主国家が戦争を否定するのは、単純、明快に当然のこと、自然なことである。昔の軍隊で将校になって、部下をこき使った覚えのある人達の中には、今もって戦争を、讚美とまでは行かなくても、肯定はする人達が、多くの身辺にも複数でいる。因みにぼく自身は、敗戦の直前三ヶ月間、陸軍輜重二等兵であった。

武器は完全な消耗品である。戦争の規模が大きくなるにつれて、武器も大量に生産され、平時は死蔵されているが、戦時には惜しみなく浪費される。武器の目的は殺戮と破壊である。武器は何ものも生み出さない。それを承知で、武器は世界中で日夜増産され、「改良」されている。それを支える原理は、弱肉強食、優勝劣敗、機能の原理そのものである。

ホモ・サピエンスはこの原理を超えて、実存の原理

に立つようになったとき、はじめて sapient (賢い、智慧のある) 状態になるのである。

人間にはもともと闘争本能がある。本能だからなくなりようがない、という戦争肯定論がある。成程本能はなくならないかもしれない。しかし転換することはできる。ぼくは闘争本能の転換あるいは昇華された形がスポーツだと思っている。戦争がしたくなったら運動場に出よう。それならばよくも賛成である。ぼく自身も参加するに吝かでない。昔ばくも姿勢がよくなるからと、祖父が勧めるので、剣道をやった。一向に上達はしなかったが、小学校低学年から高等学校を出るまで続けた。大学を卒える時になってぼくは、前記の市河先生から、旅順工科大学予科に行くようにと言われた。そしてそこで終戦まで勤める結果になった。戦争が世界戦争に拡大した頃、上海を出航した船が、数名のドイツ人の盗賊に乘取られる事件が起きた。その賊どもは船の高級船員数名を殺したために、操船が思うに任せなくなったらしく、営口に入港する積りが大連港外で岩礁に乗り上げてしまった。遼東半島、当時の関東州は日本の植民地であったから、盗賊どもは日本の官憲に捕えられて、旅順の刑務所に収容された。あ

る日突然ぼくは、それらの囚人達の教誨を委嘱されたデンマーク人の牧師に同行するよう、言い付かった。何のためであったかは今もってよく判らないが、兎に角ぼくはその牧師と一緒に、時折刑務所を訪れることになった。そんなある日、刑務所に日本刀を商う男が来ていて、看守達が思い思いに長刀をかざして、品定めの中中というところに行き合わせた。それを見た途端、デンマークの牧師がいきなり「Dangerous!」と叫んだ。刀剣というものは日本人にとっては芸術品なのだ、ぼくは手を尽して説明したが、牧師は剣によって起つ者は剣によって倒れると、聖書に書いてあると言ひ、ぼくの説明の趣旨は判ったが、刀はやはり dangerous であると言ひ張って、譲らなかつた。ぼくはその時は、芸術の判らぬ奴はこれだから困る、と思つた。それから数年、剣によって起つた日本は剣によつて亡びた。

戦争と、そのための軍備が、いかにわれわれの日常生活を圧迫し、量質ともに低下させるかは、軍備をやることにした日本が、焼け野原の中から立ち上つて四十年、現在では世界一の黒字国になっている現状を、虚心に見れば一目瞭然ではないか。戦争ほど民主

的でない、建設的でない、実存的に筋の通らないものはないのである。

(6)

土地は天からの授かりものである。水や大気や太陽の恵みを、われわれが共通に享受しているように、土地も本来共有のものであるべきである。天与の賜物に既得権などというものは、本来あるべきでないのである。土地は他の三者と違って、太古の昔から一部の人間の専有に任されて来た。専有の形式には、時代と共に幾変更があつたけれども、専有そのものの正当性が疑われたことは、嘗てなかつたらしい。それほど土地専有には過去の因縁が、しつこくこびり付いている。

これを一挙に払拭することは無理かも知れないが、出来るところから段階的に、何とか完遂する必要がある、今や切実な問題になつて来た。日本は敗戦の結果、「進駐軍」の威力によつて、土地改革を経験した。しかしそれは改革であつて、根底的な変革ではなかつた。土地の私有権は未だに基本的権利であるかのように、認められている。欧米「先進国」の政府には、日本と違って、確乎たる土地対策があり、土地は万民の共有物

という基本原理が、兎も角も生きて働いているように見えるのに、われわれ日本人はそんなことは考えてみたこともないのでないか。われわれ日本人は基本原理についてはいつも三猿主義で、煩被りをする伝統が出来てしまっているように思われる。

ぼくはそのことを、日本の芸事について感じ続けて来た。例えば先にあげた剣道である。数多くの流派があり、その数だけその道の達人がいる。達人とはその流派の技術の秘義を体得した者のことである。しかしその達人に、剣道とは要するに剣によって人を殺す術であり、殺人は本来人倫に反するということ、基本的認識が果たしてあるのだろうか。柔道、弓道その他武術はもともと殺人術なのであって、平和の今日、それがスポーツの形に転換されているに外ならないのである。そのほか茶道、華道などについても、それぞれの流派の技術、作法の練磨は至れり尽せりである。細部の隅々に至るまで、実に繊細微妙な理論、理由付けが完備している。祇園祭、高山祭などの祭儀や、相撲までが古式床しく、紋付、羽織、袴でいとも厳かに執り行われる。しかしそれら全体が依って立つ基本原理は、ということになると、そんなことはどうでもよい

ではないかということになってしまう。原点から眼を外らすために、細部にバカ念を入れたのかと言いたくなる。この辺りのことを、ぼくが一際強く感じたのは歌舞伎であった。歌舞伎の舞台は美しい。神経が行届いている。俳優の衣装も豪華である。所作も綿密な計算に基づいて周到である。しかし戯曲を一貫しているのは、前時代的な、いわゆる封建思想である。現代には通用しなくなっているものが多い。ぼくは見ていてバカバカしくなったことが幾度もある。歌舞伎は理屈で見るとではない。その場面の美に酔えばよいのだ、とファンは言う。それも判らぬではないが、それでは逃避になると、ぼくはつい思わずにいられない。演劇の持つ普遍性を想うからである。

逃避といえぼくは、若い頃は芸術なり学問なりに没頭すること、三昧境に入ることが人生最高の境地であると思っていた。Art for art's sake に憧れ、研究室で机の周囲に、一筆二筆数式らしきものを書きつけた紙片を、山と散らしている数学者の姿に感動したりもした。ところがその後、人情を知らない心理学者、倫理を弁えぬ倫理学者、科学の本質が判っているのかな、という気のする科学者といった人達に出遇う羽目

になって、学者という人間と、学問とは別のものと考えないと、ほく自身納得がいけないし、当の学者先生のためにもならないことに気が付いた。丁度その頃、当時東北大学で哲学を講じていたレーウィットという人の著書に、日本人の精神構造は二階建てで、梯子がないという文章があるのに出喰わした。二階の三味境と、階下の日常生活の間に、梯子がかかっているという情景を考えると、梯子のない二階の三味境でいい気になっているのは、これが即ち逃避ではないかと思うようになった。御法度のマルキシズムの研究に凝って、ぼくには何のことか判らぬ難解語を吐き散らしている大学生が、家に帰ると我儘一杯の、目に余る暴君でしかないのを、身辺に見聞きして、苦々しく思っていたせいもある。宗教と同様、芸術も学問も科学も、一つ間違うと阿片になるらしいことに気がついたのである。

日本は島国であり、雑種民族ではあっても、長年他から隔絶した暮らしが可能であったので、単一民族のような纏まりができてしまった結果、自由とか安全とか基本的人権などといった問題について、突込んだ反省を強いられることなしに過ごして来てしまった。そのためにも島内に限定された、社会内部の折合いが第一

義となつて、人間を支える原理といった立入ったことには、触れない方がむしろ得策という伝統が出来てしまった。そこで自分の属する社会の出来事でも、裏面做起ったことは、深刻な事件ほど表面には出ず、よその国から指摘されて初めて気が付くといった事態も、珍しくない有様である。表沙汰になった場合でも、われわれはその真相を徹底的に究明することよりも、ほどほどに「折合い」をつけることの方に熱心である。歴然たる事実でさえも、何とかゴマカして綺麗ごとにしてしまおうとする。ロッキード事件にせよ、教科書問題にせよ、南京大虐殺事件にせよ、最近の歴史に限定してさえ、残念ながら例は少なからずある。こういうお国柄では、土地問題だけが例外というわけには行かないであろう。しかし世界の大勢は大きく転回しつつある。一国だけがユニークさを墨守したまま、孤立しているわけには行かなくなっている。黒船は今日も沖合に來ているのである。

(7)

旧国鉄用地の一部が、競争入札という方法で、法外な価格で私企業に売り渡されたらしい。本来国有鉄道

は「国有」である。国有とは国民全体の財産であるといふことである。それを借金の重荷に目が眩んだにもせよ、一部局が勝手に処分するなどとは越権も甚しい。日本国は敗戦後、たとえ戦勝国の圧力があつたにせよ、軍国主義体制の非を悟つて、民主主義を国是とした筈である。旧国鉄当局は自らの不明を先ずはつきりと認識し、その失態を国民に対して償う責任がある。国民に兆単位の借金の肩代りを強いる一方では困る。私企業も私企業である。経済原則などというものは、天与の賜物でない、人間の造り出したものの流通に限りて適用されるべきものである。本来人間の造つた覚えのない土地を、投機の対象にした結果、無辜の庶民が住む処を追われたり、猫額大の土地すらも安んじて使うことも出来なくなつたとあつては、日本において民主主義とは一体何なのかと問わずにいられない。一部の権力や富が、庶民の安寧秩序を破壊するなどということは、天理に反する。営利のためにやつたというなら、営利とは国民に対して、いかなる権能を持つものなのか、営利を優先的に正当化できる原理があるなら明示して貰いたい。民主主義とは常に、必ず、国民全体に対する配慮が不可欠なものの筈である。

さらに、いつものことながら、腹に握えかねるの態度である。彼等は何もしなかつた。わざと何もしなかつた。その証拠に、地価が騰るだけ騰つたところで、土地関係業者からの政治献金という名の莫大な金額が、新聞に公表された。「合法的」な献金が新聞に公表される、そこが民主主義ではないかとても嘯くのか。とにかく政治家連は、取るものは取つたところで、やつと腰を上げて、「地価抑制」のための委員会を設けることにした。この委員会が答申を出すと、今度はその内容を実施に移すための、又別の委員会が設けられることであらう。そうこうするうちに二年や三年は経つてしまふ。これが彼等の常套手段である。この間に土地ブローカーや、それに加担する金融機関は、八面六臂の「活躍」ができるというものである。

列島改造論とやらいう、列島総地あげ論が唱えられて以来、日本の社会は質的に、急激に劣化の途を辿っている。唱えた本人が疑獄の中心人物になり果てているながら、一向に恥じる気配がない。商いと詐欺の別名かと疑わざるを得ないような事件が、毎日のように起こる。犯人が捕まつても彼等は恐れ入りました、済

みませんとは、決して言わなくなった。言を左右にして、傲然と自分を正当化しようとする。判決が出ると、必ず不服を申し立てて控訴する。その又判決が出るまでには、下手をすると十年が経つ。ひとの噂も七十五日か。

ルース・ベネディクトによれば、日本の文化は恥の文化だということであったが、現状では恥知らずの文化だと言う外はない。

今世を蔽っているのは、モノの跋扈、金権の跳梁である。民主主義の名に隠れて、個人の、又集団の、利己主義が横行している。あらゆるものが金に換算される。金に換算できないものは価値がないらしい。金が金を生むというマネーゲームとやらが大流行である。「合法的」なことをして何が悪い、ということなのである。国民総プロカーである。

科学技術の進歩によって、工業が画期的に発達し、需要を大幅に上廻るモノの大量生産が可能になった結果、生産されたモノが誰の手に渡るかは、生産者には全く見えなくなった。又不特定多数に生産品を売りつけるためには、市場の獲得が至上命令になる。市場とは具体性のあるような代物である。こうな

ると、売りつける個々の相手のことなど構ってはいられない。

こうして産業組織、経済構造が拡大し、複雑化するにつれて、生産者と一般消費者との間が間接的になり、その隙間に投機や賄賂やプロカーの暗躍などが入り込むスキが到る処に出来、国民生活の秩序と安全が脅かされる結果になっている。現在これを阻止する原理がないところが、わが国の特長とも言えそうな有様なので、例えば国会の政治倫理審査会の現況が、そのことを象徴的に物語っている。被害者が抗議を申し入れようにも、相手は官庁とか企業とかという集団であって、その成員は大臣、社長以下すべて一介のサラリーマンに過ぎず、責任をとる主体がどこに在るのか、甚だ漠然として捉え難い。仮りに責任者の処分なるものが行われても、集団自体は抜け抜けと生き延びる仕組になっている。庶民はいつも暖廉と腕押し、泣き寝入りということになる。旧国鉄当局も、今は民営になっているので、昔のことは知ったことでない、と、多分言い抜けるであろう。

当年とって七十七歳になるべくは、このところ毎年、九月十五日の敬老の日が近づくと、何やら遺瀨な

い気持になる。父の日とか母の日は、敬父の日、敬母の日ではないのに、どうして老人の日だけが「敬老」なのだろうか。本心は老人は厄介者で、できるだけ早く姿を消して貰いたいのだが、まさかハッキリそれを言うわけにも行かず、ということではないかと、つい僻みたくなる。この日の前後に独り住まいの老人が自殺したり、亡くなったのが何日も発見されずいたりするケースが、いつもより多く新聞記事になるような気がするのも、老いの僻みであろうか。せめて敬老の日も、老人の日ということにして貰いたい。これ以外のいわゆる国民の祝日の、どれをとっても、無条件に情の籠った、めでたい日というのが、敗戦後はなくなってしまった。この頃は高度成長のお蔭で、生活が豊かになって、グルメ志向の昨今は尚更のこと、お正月だといっても格別のこととはなくなった。むしろ三ヶ日は粗食の日ということにもなりかねない。建国記念日、憲法記念日は、右翼と左翼が正反対の主張を掲げて罵りあう日、殊に後者は政府が知らぬ顔をする日で、何となく鼻白む思いしかしないし、春分の日、秋分の日についても、お正月同様伝統行事がどれほど各家庭で、思いを籠めて行われていることか。勤労感謝

の日などと言われても、こう毎晩午前さまでは、泌々とした気持になるには草疲れすぎていると言う人が大半ではなからうか。政府のお仕着せでない、ヴァレンタインデーやクリスマスの方が、少しは実感が籠っていきそうな気がする。要するに国民の祝日などと言われても、形だけのことで、情が籠らず、商魂の逞しさばかりギラギラする日と言った方がよさそうである。

ついでに付け加えると、十二月八日は太平洋戦争勃発記念日であるが、この日は政府の一切係わらない、国民の自主的な反省の日としたい。「過ちは繰返しません」という標語は、この日のためのものでありたい。

ジョージ・オーウェルのあるエッセーの冒頭に、爆撃機から爆弾を落とす役目の兵士には、その爆弾が地上の同胞に、どのような痛みを与えるかについて、何の自覚もない、と書いてあった。むしろ快感をすら覚えているかも知れない。地あげ屋に、だぶついている金を、惜し気もなく融資した銀行家も、その結果が住み慣れた土地から無理矢理立退かされることになった、罪もない市民の痛みなど、想像してみたこともあるまい。

こういうことが庶民の蠶蹙ひんじやくを買いながらも、結局は罷り通るといふのは、優勝劣敗の機能優先を当然とし、give and takeは正しい究極の原理と思ひ込んで、疑って見たこともないところから起るのである。民主主義が裏目に出ている。日本はものごとがよく裏目に出る国だと、ぼくは思っている。昔ぼくは英語の教科書で、Honesty is the best policy. ということを書いた。正直は最上の政策ということだが、その後世の中をつらつら眺め渡していると、この格言のbestという字は、日本ではBadと書き直した方がよいのではないかという気がしたものである。Law(法)とかduty(義務)とかを最も重しとするイギリスでは、法は守るために作られるが、わが国ではそれは破るために作られると、自嘲したこともある。そういうえばアンドレ・モローは「イギリスに赴任する若き外交官に与える」というエッセーの中で、「イギリスに渡ったら、法は絶対に守ることだ。このこと夢々忘れな。」と忠告していた。

近頃不特定の他人を突然殺傷する事件が、よく起る。電車の中で偶々隣に坐った男に、出し抜けに金槌で頭を殴られた人が、そのために命を落す事件があっ

た。バスの中にガソリンを撒いて火をつけられたために、多数の人達が焼死した事件もあった。「過激派」は街のそちこちに爆弾を仕掛けて、縁もゆかりもない人々を殺傷し、そのことを誇るかのように「犯行声明」を出す。他人の痛みに無感覚、無関心になってしまった世相が、不気味である。戦時なら兎も角、平時にこのような不特定多数の殺傷事件が、しかも頻々と起るのは、末期的症状という気さえする。

こういう所行を敢てする者共に、直接了簡を改めろと言ってみたところで、事態は解決しそうもない。遠廻りながら、われわれ銘々が他人の痛みに対する実感を取戻す策を立てるより外あるまい。ひとごとをわがこととするための方策を実行し、その実績を積み上げて行く外はなさそうである。

アメリカの艦載機の執拗な発着訓練の轟音に、疲れ切っている基地周辺の人達。その基地を自分達のところから強引に移されそうになって悲鳴をあげている、三宅島の人達。

防衛庁など関係機関の諸公は、一泊二日でもよい、現地に宿営して、現地の痛みを実感してほしい。そうすれば、国権を楯に庶民を強圧して、軍備増強を図る

よりも、軍事協定そのものの見直しの方が、より根本的で重要な問題であることが、肌で判る筈である。

国会議員のセンセイ方は、国民から税金を絞り上げるための、税制改革案を練るに先立って、なすべきことがある筈である。それは自ら税金を払うことである。等しからざるを体験的に憂えるべきである。それがなくては庶民の重税感、不平等感の実感は得られない。国会議員だから税金は払わなくてよい、というのは、正当な根拠のない、特権意識、独りよがりである。特権は民主主義と真向うから矛盾する。野党の面々も、カヤの外で呆然としていないで、まず自ら納税者となることで、庶民との一体感を実感として味わい、与党に衝撃を与えて貰いたい。そこから「一党独裁」を打破する途も、自ら拓けるであろう。

きっかけは卑近なところにある。われわれも銘々の生活に実感を取り戻すために、外ならぬ自分の周囲を、足許を、しかと見定めることにしよう。問題は到る処に山積していることが、われとわが眼に映って来るであろう。庶民のこうした自覚と、それに基づく行動が、民主主義の根幹なので、お上に万事任せっきりは即刻やめると覚悟したいものである。

(8)

人類の意識は、長い年月をかけて、徐々にその領域を拡げて来た。ついこの間まで、自分の村から出たこともなかった者が、今では世界中を旅するようになった。自分と自分の家族を守り養うのに手一杯であった者が、今ではアフリカやインドの旱魃や洪水を案じている。高度成長による幸運な変化であろう。われわれの意識は更に拡張、進展の可能性があることを、この^{いささか}経緯が示している。未熟さ、不完全さは、成熟と完成への過程に外ならない。その気にさえなれば、将来に希望があることになる。

そこで当面の問題は、国の意識の超克である。われわれの視界は、実質的にはまだ、国あるいは国境という壁に遮られている。グローバルに、人類全体を想うことは、実際上まだ出来ないでいる。ましてや人類をも超えて、全存在を視野に入れるなどということは、現状では空論の誇りを免れないかもしれない。それが空論でなくなるためには、ここ一番の飛躍が、ドラスティックな原理の転換がなければならぬ。機能主義から実存主義への転換である。民主主義というもの

も、実存主義の前には、実は一つの過程に過ぎない。民とは人である。人とは存在一般から見れば、特殊の一環に過ぎず、全体から見れば部分に過ぎないからである。

現在ヨーロッパ共同体諸国を旅する者は、国境通過の単純なのに驚くであろう。国境がなくなったわけでは更々ない。国境は厳然として存在するが、それを越えるのに手間ひまがかからなくなっているのである。このことは地球上の国々の間にも、同じことが実現する可能性を示唆している。われわれが自国の一つの県から他の県へ、何の造作もなく移って行けるように、一つの国から他の国へも、同じ造作のなきで入れる可能性が、現に示されていることになる。

この可能性を、国境、人種、民族を超えて、完全に実現するために、実存主義への転身が必要なのである。

この転身なしには、われわれは軍備を、縮小することとは出来ても、全廃することは出来ない。

ソ連では共産主義の帰結として、土地は国有であると聞いている。しかしそのソ連が国境の障壁を撤廃しようとしたことは、嘗て一度もないし、当面将来もそ

の見込はなさそうである。否、むしろアメリカとの對抗上、その障壁は高く、強固になる傾向にある。日本が固有の領土であるとして、千島列島末端に位置する小島の返還を、再三再四要求しても、ソ連は頑としてこれに応じる気配はない。日本との面積比からいえば、ソ連にとって芥子粒同然の島々である。その理由の筆頭は軍事施設がそこにあるからであろう。軍備の必要がなくなれば、つまりアメリカとの間の障壁が解消すれば、話は変わるかもしれないのである。要するにソ連は、共産主義は、現実には資本主義同様、機能主義を超えていないのである。

軍備は優勝劣敗、機能主義そのものである。日本はその軍備を撤廃することを、憲法に明記している国である。今更ずるすると再軍備を図るなどということ、歴史に逆行することになる。アナクロニズムである。

ぼくは高校二年のとき、H・G・ウェルズの Probable Future of Mankind (人類のあり得べき将来) という論文を読まされた。そこに書かれていたことの中で、二つを今もハッキリと覚えていた。一つは将来戦争が起こった場合、最も安全率の高い場所は、最前線の塹

壕の中であらうということ。第二はこれからの人類は全世界を自由に移動するようになるので、例えばニューヨーク辺に、人類全部の戸籍簿を一括して備えることにするがよいということ。この二つである。昭和一桁時代にこのような文章を読んで、ぼくは深い感銘を受けたものであった。前者は兎も角、後者については、電子機器の発達によって、地球上の只一箇所にあるデータを、地球のどの部分にいても、瞬時に利用することが、既に可能になっている現在、更めてウエルズの頭脳に敬意を表したくなる。本来国境などというものを超えている科学のお蔭で急速に進歩した技術を、世界各国が利用し、恩恵を受けることを、現に妨げているのは軍備であり、政治である。国家という体制の上には胡坐をかいて、權威主義を当然のこととしか考えられないような軍人や政治家は、世界の迷惑である。現に権力に酔っている人間に、了簡を改めると言ってみても、それが彼等の足場を崩し、覆すことになるとなると、オイソレと応じて貰うわけには行くまい。しかし、機能主義者が権力を揮っている、片や暖衣飽食する国民がいるのに、他方では身に纏うものもなく、饑えに苦しむ多数の人々がいるという恥ずべ

きアンバランスは、解消のしようがない。昔はここで一揆や革命が起こったのであろう。しかし科学技術は武器をも画期的に精巧にしているので、権力者の持つ軍備に対しては、庶民は歯が立たない。それに機能主義に対抗するに、機能主義を以てするというのは徒勞であり、愚かなことである。権力者に武力で直接ぶつかるのでは、成功の見込がないとなれば、われわれ自身が権力主義、機能主義を超えてみせる外はない。マハトマ・ガンディーのことが想い起こされる。実存主義に徹することによって、柔よく剛を制するより外に途はない。インドはイギリスの植民政策というエゴイズムに抗して、兎も角も独立を勝ち得たではないか。次の段階は、全世界の民衆が手をたずさえて、国境を、否定するのではなく、超えて見せることによって、権力者に肩すかしを喰わせることである。そのためには、われわれ庶民一人一人が、大地は天からの授かりものであって、人の造ったものではないという原理を、自覚体得し、為政者は権力をもって民に臨むべきものではなく、民こそ真の主権者であることを、実証しなければならぬ。この一事が果されれば、軍備は無用の長物と化し、めぐり来た春に遇う雪のごと

く、自然に消え失せるであらう。

ここまで来て、今迄書き連ねてきたことを読み直してみると、何を今頃書生談義をと、殊に専門家といわれる人達から、笑われそうな気もする。専門家とはそういうものである。しかしこのほど日本の政界の最大の関心事であった、自民党の次期総裁選びのいきさつを眺めていると、ほくには日本でこそ、ほくの所論が一番実現の可能性があるのではと、思われて来るのである。何故なら、次期総裁の候補者たちが、高級料亭の密室に籠って、延々とやって来た二者会議とやら、三者会議とやらは、要するに国民を忘れた権力のたらい廻しに過ぎず、国民はコップの中の棒ちぎり、困ったものだと思っていたが、それが一向ラチがあかないので、この上はいっそジャンケンで決めたらどうかねと、言いかけたところで、やっと「親分」の裁定が出て、一件落着となった。一国の宰相となるべき人の人選が、冗談にもせよジャンケンで決めたらなどと言われるほど、日本の社会は醒めて、民主的なのだ。政治家の間では、政治哲学も政策もそっちのけで、昔ながらの親分子分関係で、国民には何のことやらわけの判

らぬ現象が起こり続け、外国の「親分」との間にまで、同じような縁を結びたがったりしている一方で、国民の方はそれを茶化すほどの余裕が出て来ていて、首相が誰になろうと、官僚がいかに縄張り争いと保身にうつつを抜かそうと、国民はまんまとその手の下をかい潜って、わが途を往く実力を貯え始めているのだという気がして来たからである。そういえば戦時中の共産圏やいわゆる枢軸国の頭目達の顔を思い浮かべてみても、日本の顔だけが何となく貫禄不足であった。物凄い独裁者、余人には齒の立たない親分などというものは、古往今来居たことがないほどの、良い国にオレは生まれついた、果報者なのかも知れないぞ、という気がして来たのである。

このカンが当たって、日本が世界の片隅から、清新の気を全世界に漲らせる日が、一日も早く来ることを期待したい。

(一九八七、一〇、二二)